



TITLE:

京大広報 No. 494

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 494. 京大広報 1995, 494: 1060-1071

ISSUE DATE:

1995-11-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209139>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 494

京都大学広報委員会

目 次

<大学の動き>

厚生補導担当教官研究会の開催.....1061

<栄誉>

於保不二雄名誉教授、岡田節人名誉教授が文化功労者に選ばれる.....1061

入谷 明名誉教授、石井米雄名誉教授、北川善太郎法学研究科教授が紫綬褒章を受章.....1063

<部局の動き>

基礎物理学研究所研究棟の完成.....1063

理学ミニ博物館の開館.....1064

<紹介>

化学研究所—無機素材化学研究部門—.....1065

—京都大学の百年（第13回）—
学長と総長のいずれが正しい
職名なのか.....1067

計報.....1068

能楽鑑賞会の開催.....1069

日誌.....1069

<随想>

聖大ヤコブの移居
名誉教授 前田 敬 作.....1070

<コラム>

冬の序章 林 基 治.....1071

『京大広報』に対するご意見について（お願い）.....1071



本学能楽鑑賞会で演じられる能「遊行柳」の一場面

—関連記事本文1069ページ—

<大学の動き>

厚生補導担当教官研究会の開催

学生部では、例年学生部委員会委員を中心に学生に関する諸問題を討議し研究する厚生補導担当教官研究会を開催してきたが、今年度も10月14日学生部長、学生部委員会委員、学生部職員等、計37名が参加して、「キャンパス施設の機能と構成」、「学生部の役割の現状と今後の在り方」をテーマとする標記の研究会を開催した。

最初のテーマは、平成6年度教育研究学内特別経費により学生部が行った共同研究プロジェクト「学生・大学院生の学習・研究をサポートする大学システムの在り方に関する研究—21世紀を展望し国際比較を中心に—」の中のひとつのプロジェクトで、これを担当された農学部岩井吉彌教授、体育指導センター井街 悠助教授を講師に招き、諸外国の大学の実情を本学の現状と比較しつつお話しいただき、それをもとに意見交換を行った。

井街 悠助教授の講演は、先進諸国での大学施設では「地域環境の保全と調和、地域コミュニティとの協調性、快適性と至便性、統一性（秩序と調和）」が重要視されていることをスライドを用いて指摘し、ひるがえって京都大学のキャンパス・施設に対する外国人留学生、訪問者の印象では上の理念には合わない点が多いこと、またこうした理念に添って今後の本学キャンパス・施設改善の方向が提示された。

岩井教授は諸外国の大学の資料にもとづき、学生のため、また社会に向けてどのような施設、組織・プログラムをもっているかを紹介し、「芸術・文化面の重視、障害者に対する施設・サービスの充実、学生ユニオンの幅広い機能、学内外への情報のサービス、大学と地域との密接な関わり」などを注目すべき点として挙げられた。

後半では「学生部の役割の現状と今後の在り方」について職員の意見発表と討論が行われた。

(学生部)

<栄誉>

於保不二雄名誉教授、岡田節人名誉教授が文化功労者に選ばれる

このたび、於保不二雄名誉教授、岡田節人名誉教授が平成7年度文化功労者に選ばれ、11月6日国立教育会館で顕彰式が行われた。

以下に両氏の略歴、業績等を紹介する。

於 保 不二雄 名誉教授



於保不二雄名誉教授は、明治41年1月22日下関市に生まれ、昭和7年3月京都帝国大学法学部を卒業し、同年4月同大学助手、同8年9月立命館大学助教授、同9年4月、再び京都帝国大学助手に採用された後、同10年1月京都帝国大学助教授、同18年9月同教授となり、同46年3月本学を停年退官するまで民法講座を担当した。その間、昭和22年2月から2年間、及び同29年3月から2年間本学評議員をつとめ、また同34年1月から2年間京都大学法学部長及び本学評議員をつとめた。学外においては、永年にわたり司法試験考査委員、法制審議会民法部会委員をつとめ、法曹の養成及び立法事業に貢献したほか、京都家庭裁判所参与員及び調停委員、京都労働基準局委員、京都府建設業審議会委員、京都府建設工事紛争審査会委員等をつとめ、深い学識・経験を通して社会に貢献した。

同名誉教授は、民法学の研究分野において顕著な業績を挙げ、その学術上の進歩に著しい貢献をした。その代表的著書の一つである『財産管理権論序説』（昭和29年）は、近代私法における私的自治の基礎構造を解明し、我が国で初めて、「財産管理権」概念を独立の権利のカテゴリーとして構成すべきことを提唱したものである。同書は、近代市民法体系が人格・財産主体中心に偏りすぎていることを指摘し、現実的な資本主義経済社会にあっては、財産の帰属と財産の管理とを分離し、財産それ自体をもう一つの焦点として市民法体系を再構築すべきことを説くもので、周到な制

度史・学説史的検討を背景として、雄大かつ独創的な着想と明晰透徹した論理をもって主張を展開し、その後の民法学の発展に大きな影響を及ぼした。法律学の根本に関わるこのような基礎的研究の上に、同名誉教授は、民法の各分野にわたる精緻かつ堅牢な解釈体系を打ち立てた。その著『民法総則講義』(昭和26年)、『債権総論(法律学全集20)』(昭和34年)、『同〔新版〕』(昭和47年)、『物権法(上)』(昭和41年)などはその結晶である。そのほか、親族法、相続法の分野においても多数の注釈や個別論文がある。

同名誉教授は、教育面においては、昭和15年(当時は助教授)に民法第四講座(親族・相続)を分担して以来、同46年停年退官するまでの間、実に31年の永きにわたって民法各科目(民法第一部「総則」、民法第二部「物権」、民法第三部「債権」、民法第四部「親族・相続」)の講義を順次担当した。同名誉教授の講義及び演習においてにじみ出る学問的情熱と真摯な教育態度、及び透徹した思考に基礎づけられた綿密無比なる法理論は、その高潔な人格と相まって、多数の学生に深い学問的・人格的感化を与えた。さらに、同名誉教授は、昭和21年、終戦直後の混乱の中、学生有志が法律相談部を創り活動するにあたり、顧問として物心両面にわたりこれを支援し、爾来昭和46年の退官まで、毎週土曜日午後の「市民のための無料法律相談」には欠かさず出席し、主審として学生の指導に当たった。これはまさしく生きた法学教育の実践であり、法律相談部において同名誉教授の指導薫陶を受け、今日、学界、裁判官・検察官・弁護士等の法曹実務界において、中心的役割を果たしている者が少なくない。

同名誉教授は、本学退官後は、弁護士として企業法務の整備に尽力する傍ら、多年にわたり京都市民民事判例研究会等において後進の指導・育成に寄与した。

同名誉教授は昭和54年に勲二等旭日重光章を受章したが、このたび文化功労者に選ばれたことは、誠に喜ばしいことである。

(法学研究科)

岡 田 節 人 名誉教授



岡田節人名誉教授は、昭和2年2月兵庫県伊丹市に生まれ、同25年京都大学理学部を卒業し、同29年助手、同35年講師、同36年助教授を経て、同42年教授となり、新設された生物物理学原形質物性学講座を担当した。昭和56年から

2年間本学評議員。昭和59年岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所長となり、平成元年に岡崎国立共同研究機構機構長、同3年退官。京都大学(昭和60年)、基礎生物学研究所(平成3年)、総合研究大学院大学(同6年)から、それぞれ名誉教授の称号を授与されている。

同名誉教授は発生生物学の分野を専門とした。受精卵から多細胞個体が形成される発生というプロセスを、細胞の変化という面に焦点をおき、当時斬新であった細胞培養の技術を駆使して広汎な研究を展開した。細胞分化の研究においては、一度分化した細胞もさらに別のタイプの細胞へと変化することを証明、分化の機構の理解のための「分化転換」なる新しい概念を確立した。その成果は著書“Transdifferentiation”(Oxford Science Publication, 1991)に集大成されている。

一方、細胞同志の接着が多細胞生物体の形づくりの基礎的過程であることに注目し、昭和32年来、このテーマの研究を行なった。その結果、細胞同志の接着におけるカルシウムの役割を発見し、これを発展させて細胞表面には接着の働きを担う蛋白分子が存在することを示した。この研究は、竹市雅俊京大教授によって継承され見事な開花をみせている。

同名誉教授には、これらの研究業績により昭和36年日本動物学会賞、同49年内藤記念科学賞、同63年アルコン科学賞(米)が授与された。同名誉教授は、発生生物学の分野の研究振興に国際的に大きく貢献し、昭和56年から同60年の間、国際発生生物学会総裁をつとめた。上に述べた顕著な研究業績に加えて、これらの努力により、平成元年には国際発生生物学会からハリソン賞を授与さ

れ、名実共にこの分野において世界的に最高の敬愛を受けている存在である。また、昭和59年に京都新聞文化賞、同61年に中日文化賞、平成2年には紫綬褒章を授与されている。

岡崎国立共同研究機構赴任後は、文部省などの諸委員として我が国の研究行政や学術上の国際交流の推進に尽力した。平成3年国際生物科学連合副総裁に選ばれ、専門分野を越えた、広い生物科学の地球規模における研究推進につとめつつある。平成5年来、新設の財団法人生命誌研究館の館長であり、生物学に基本をおきつつ、「文化としての科学」のあり方を探り、かつその方向への独自の実践を試みている。

以上のような輝かしい研究業績と、国際的な学術発展への指導性、加えて文化としての科学を指向した指導的活動などが評価されて、このたびの栄誉を受けたことは、誠に喜ばしいことである。

(理学研究科)

入谷 明名誉教授、石井米雄 名誉教授、北川善太郎法学研 究科教授が紫綬褒章を受章

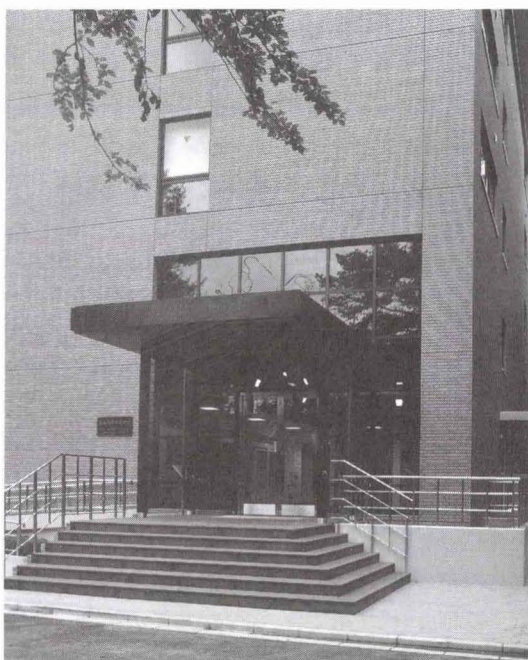
入谷 明名誉教授（元農学部教授、家畜繁殖学）、石井米雄名誉教授（元東南アジア研究センター教授、東洋史学）、及び北川善太郎法学研究科教授（民法学）に我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、平成7年11月3日紫綬褒章が授与された。

<部局の動き>

基礎物理学研究所研究棟の完成

このたび、基礎物理学研究所研究棟（鉄筋コンクリート造5階建3,330m²）が本部地区北部構内に完成し、10月30日（月）午前11時から基礎物理学研究所研究棟会議室において竣工式が挙行された。

式は、長岡洋介基礎物理学研究所長の挨拶、井



村裕夫京都大学総長の挨拶、中村卓史基礎物理学研究所教授の工事経過報告、伊達宗行日本学術会議第4部長の祝辞、人見滋樹胸部疾患研究所長の祝辞があり、そのあと、建物・施設の披露が行われた。施設では3階全フロアーを占める図書室、電動書架を備えた約5万冊が収納可能な地下書庫が特に注目された。

引き続き京大会館で祝賀会が開催され、長岡洋介所長の挨拶、西島和彦名誉教授の祝辞のあと、湯川記念財団理事長沢田敏男名誉教授の発声で乾杯があり、中林勝男京都大学事務局長及び事務局、各部局等からの招待者、当研究所教職員等関係者約130人が出席して、なごやかに歓談した。



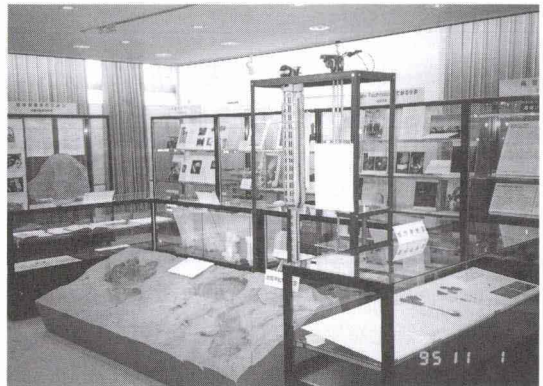
(基礎物理学研究所)

理学ミニ博物館の開館

理学研究科では、かねてより進めてきた理学ミニ博物館の準備が完了し、11月1日（水）午前11時から、北部構内理学1号館5階1室の同館において、関係者出席のもとに開設の会を催した。

このミニ博物館は、当研究科の各教室・施設で保有している自然科学関係の興味深い標本・資料類及び研究の現状を紹介したパネルを、教室ごとにテーマを定めて展示し、その活動を主として本学部・研究科に在籍する学生に紹介する目的で設置したが、学内外の方々にも公開する。

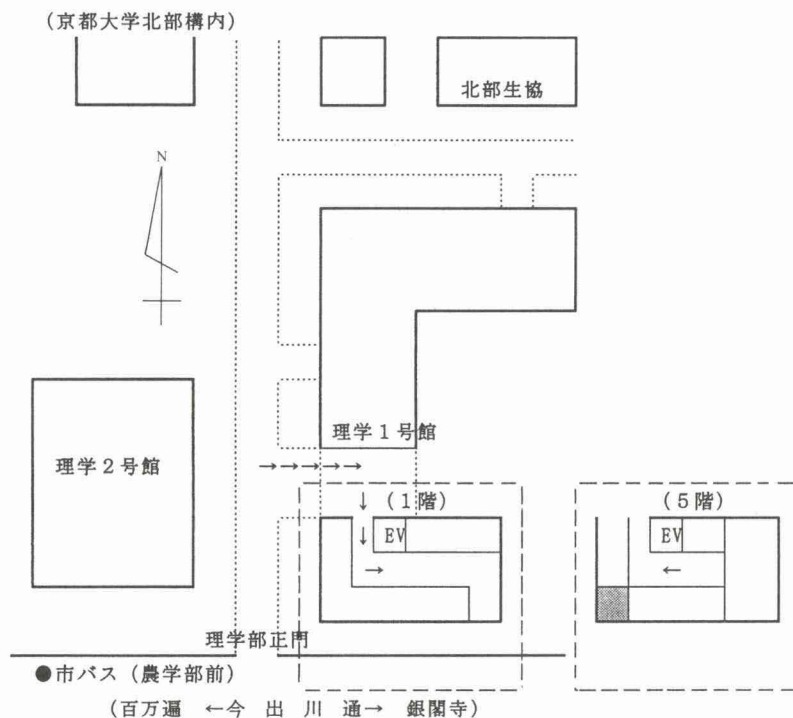
開設の挨拶で鎮西清高理学研究科長は、「小さくはあっても、自然科学の出発点が実物であることを改めて認識させるだけの力のある施設であり、学生に対する各教室のショウ・ウィンドウに



なる」と述べ、理学ミニ博物館開設の意義を示した。

なお、同館は土日、休祝日等を除く平日の午前9時30分から午後4時30分まで自由に入館することができ、場所は下図のとおりである。

理学ミニ博物館の位置



(理学研究科)

<紹介>

化 学 研 究 所

—無機素材化学研究部門—

9つの研究部門と2つの附属研究施設(合計31研究領域, そのうち3領域は客員)からなる化学研究所のなかで, 当部門は5領域(うち客員1)を占めている。そのいずれもが, 金属あるいは金属酸化物を研究対象にしている。歴史をさかのぼると, 最も古い関連研究室は昭和2年に創設されている。オーディオテープやビデオテープ用磁気記録材料である酸化鉄 $\gamma\text{-Fe}_2\text{O}_3$ の特性は, その粒子のサイズや形状により大きく左右されるが, それらの制御法の確立と工業化は, 長い研究の歴史のなかでも大きな成果の一つである。

5つのこれらの領域間の協力関係は, 共通のセミナーを開催したり, 幾つかの実験装置を日常的に共用するなど密である。客員領域では境界領域での新しい研究の展開を図っている。

領域Ⅰでは, 金属人工格子の磁気的性質を主な研究課題としている。人工格子とは, 2種類以上の元素を規則正しく, 原子レベルで膜厚を制御しつつ積層させた人工的多層膜のことで, その作成には超高真空蒸着装置を用いている。人工格子はミクロに構造を制御した物質であるとともに, 自然に存在しない新物質という特徴を持つ。当領域は, 世界にさがけて約15年にわたり金属人工格子を研究対象とし, 生成, 構造評価, およびその物性についての研究を行ってきた。

新物質には従来の物質には無かった新奇な物性を発揮することが期待されるが, 人工格子が実用的価値を発揮する可能性のひとつとして, 磁気抵抗効果(電気抵抗が磁場により変化する現象)が最近注目を集めている。磁性人工格子特有の現象である「巨大」磁気抵抗効果は, 金属鉄と金属クロムの人工格子について1988年にフランスで発見されたが, 当領域では, 「非結合型」巨大磁気抵抗効果を示す新しい人工格子を開発した。この人工格子は, コバルト, 銅, パーマロイ(ニッケルと鉄の合金), 銅の順に積層を繰り返したものである。2種類の磁性層(コバルトとパーマロイ)

の抗磁力の差を生かしたこの新しいメカニズムによる磁気抵抗効果は, 基礎研究の対象として興味深いだけでなく, 10ガウス程度の小さな磁場で大きな電気抵抗変化を発生させるという応用上の利点がある。磁気記録読取り用ヘッド材料などへの応用に期待がかけられている。

領域Ⅱでは, 新しい機能性材料の開発を目的として酸化物磁性体, 強誘電体, 高温超伝導体などの薄膜, 微粒子, 単結晶の作製, 微細構造解析, および電氣的, 磁氣的性質の研究を行っている。

長年にわたって開発してきた酸化物薄膜作製技術を用いた研究により, $\text{YBa}_2\text{Cu}_3\text{O}_7$ (高温超伝導体) などの多成分系酸化物は分子層単位で, また単純な CoO などは原子層単位で結晶成長していることを明らかにし, その結果, 数Å(1オングストロームは1億分の1センチメートル)程度の凹凸しかない平坦な表面をもつ超薄膜や人工格子結晶を作製できるようになった。そして, $\text{YBa}_2\text{Cu}_3\text{O}_7$ 単分子厚(約11Å)の超薄膜を作製して2次元超伝導理論の検証に成功するとともに, 超伝導を示す最小の格子単位を明らかにした。また SrTiO_3 (誘電体) と $\text{YBa}_2\text{Cu}_3\text{O}_7$ 超薄膜のヘテロ構造を作り, 電界によって電子を超伝導体に注入したり取り出したりすると超伝導転移温度が変化することを見出している。(図参照) 寺内 暉客員教授(関西学院大学理学部)は, これらの試料の精密な結晶構造解析を行うとともに, それに基づいて試料作製の指針となる有益な示唆を与えている。

一定の温度と圧力のもとで, どのような組成の化合物が安定に存在するかを示す平衡状態図は, 一般の地図に相当する重要なものであるが, その作成には大変な労力と時間がかかるため世界的にもあまり研究が進んでいない。本部門ではその重要さにかんがみ, 高温酸化物超伝導体に関し, $\text{Y}_2\text{O}_3\text{-BaO-CuO}$ 系をはじめ20以上の系について状態図を作成してきた。それらは, 新物質の探索や反応機構の解明に大いに役立てられている。

領域Ⅲでは, 新物質探索を旗印に6万気圧・1,000℃程度の超高圧・高温を用いる合成実験を行っている。よく知られたダイヤモンド(炭素の

高圧相)とグラファイト(低圧相)の例にみられるように、1~10万気圧に達する圧力には新物質を創り出す力がある。

銅酸化物における全く予期されなかった高温超伝導の発見(1986年)は、遷移金属酸化物一般に関する長い研究の歴史のなかでも特筆すべきものであった。しかし肝心のその超伝導機構に関しては、膨大な研究にも関わらず、まだ謎が多い。当領域は、ユニークな組成と構造をもつ化合物を極端条件下でつくり出すことにより、機構の解明と新しい超伝導体の発見に寄与したいと考えてきた。その結果、研究の新しい展開の契機を与えるものとして最近数多くの理論物理学者の注意を引き、「スピン梯子化合物」という通称を与えられた新物質を発見することができた。そのニックネームは、結晶構造の特徴に由来する。高温超伝導の舞台が銅イオンと酸素イオンから成る平面格子であるのに対し、スピン梯子格子はそれを細く切り取ったものに相当する。すなわち、銅イオンと酸素イオンを交互に一直線状に並べた鎖を梯子

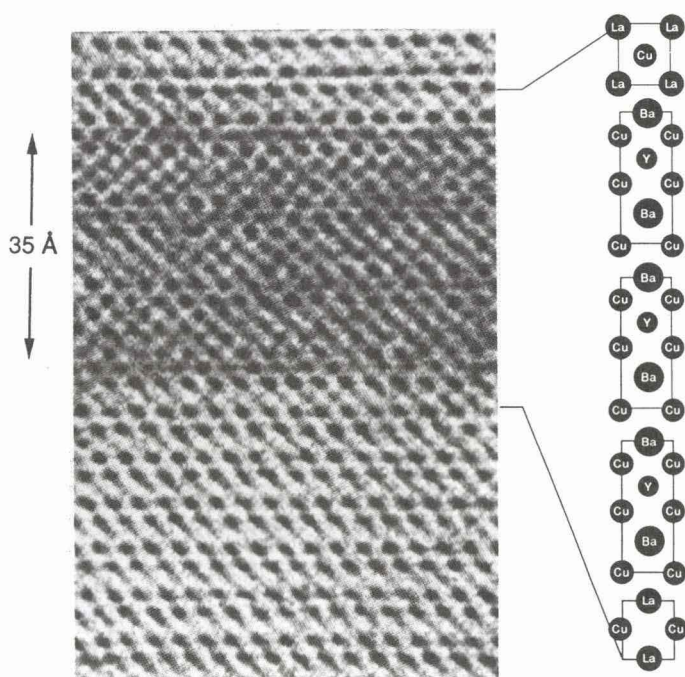
の足に見立て、それらの間を、梯子の足に相当する銅イオン—酸素イオン—銅イオン結合で結ぶ。梯子格子の電子状態の理論は平面格子のそれに比べてかなり扱いやすいものとなり、足の本数が2本あるいは4本のように偶数である場合には、新しい機構による高温超伝導が出現する可能性が高いというわけである。それを受けて当領域では、現在、その実験的な検証に取り組んでいる。高木英典客員助教授(東京大学物性研究所)は、物理学的立場から物性の精密測定を行うとともに、物性探索に関する助言を与えている。

領域Ⅳの主な研究テーマは(1)ガラス構造の解明、(2)非線形光学材料の探求、(3)ゾル-ゲル法による機能性セラミックスの合成である。結晶とは異なり、ガラスでは原子間距離や結合角度に分布がある。それを調べるために、通常の動径分布構造解析法に加えて、当領域では多核固体 NMR 分光法や *ab initio* 分子軌道計算をも用いている。

レーザー光を物質に入射すると、入射光の2倍あるいは3倍のエネルギーをもつ光が放射される

効果(光学非線形性)が現れる。次世代の超光速・超大容量光コンピュータや光通信の要となる高い光学非線形性を示す材料の開発を目指し、当領域では、透明でしかも等方的であるというガラスの特徴と、薄膜化や複合化を可能にする試料作製法であるゾル-ゲル法の特質を生かして、 $\text{PbO-Sb}_2\text{O}_3$ などの重金属酸化物ガラスや Fe_2O_3 などの遷移金属酸化物薄膜を作製して、それらの特性を第三高調波発生法や単光束法により評価している。光学非線形性の発現機構の解明と材料の設計指針の確立が最重要課題であり、この研究はガラス構造の研究と密接な関係を持つ。

金属イオンの溶液を出発物質とするゾル-ゲル法は、薄膜やファイバーといった素子に適した形状



$\text{YBa}_2\text{Cu}_3\text{O}_7$ (超伝導体) と La_2CuO_4 (絶縁体) を交互に積層した人工格子結晶の断面を、電子顕微鏡により観察した写真。4種類の金属元素(Y, Ba, Cu, La)が、特有の大きさや濃淡を持つ黒点として現れている。

をもつセラミック材料の作製、さらにはセラミックス/有機物複合体やセラミックス/半導体、セラミックス/金属ナノ複合体の合成に適している。現在、金微粒子/有機色素/TiO₂ など、異種物質のナノ複合化および微細組織制御による新しい光

機能・電子機能（特に非線形光学材料、光半導体薄膜電極および光アイソレータ薄膜素子）の創出を目指して、合成と評価に関する研究を進めている。

（化学研究所）

—京都大学の百年（第13回）—

学長と総長のいずれが正しい職名なのか

明治10（1877）年4月に発足した東京大学の総理は、19年3月の帝国大学令では総長と改称され、以後これが次々に登場する7帝国大学の伝統となった。30年6月開校の京都帝国大学には法・医・文・理工の4分科大学があり、その長は、たとえば法科大学長と称したから、これらを統括する総長という職名はそれなりに分かるが、大正8（1919）年4月の改革で学部制が導入され、学長を学部長と称するようになってからも、総長という職名はそのままにされた。戦後間もない昭和22（1947）年9月の国立総合大学令および国立総合大学官制により、京都帝国大学が京都大学へ移行してからも、総長という呼び名に変わりはない。帝国大学総長会議が国立大学総長会議に受け継がれたのも、そのことと無関係ではなからう。

総長という呼称自体は、明治33（1900）年創設の皇室博物館初代総長九鬼隆一に見られるように、帝国大学の専売特許でなく、この他にも、早大や日大などのマンモス私大は早くから総長名を採用しているが、新制国立大学では、一転して学長が正式名称となった。昭和22年3月の学校教育法や24年1月の教育公務員特例法が、いずれも学長を唯一の職名として採用したからである。東京大学は、24年7月4日の新大学制実施準備委員会で慣行どおり総長という名称を用いることを確認しており、旧称を保持して一度も学長と称したことはないようだが、本学の場合は、これ以後しばらく学長という職名が使用された。ただ、その始期は必ずしもはっきりしない。

学長名のもっとも早い使用例は、24年6月23日付の文部省大学学術局長宛の書類であるが、まだ決裁は総長印で行っている。この時期の学内達示には学長名が登場し、現に7月14日の評議会議事録には鳥養学長とあるが、7月28日のそれは元通り総長となっており、正式な手続きを経た改称ではなかったようだ。8月22日付の書類の決裁が初めて総長名を二重線で抹消して学長印を使用し、以後、2、3の例外を除き、学長印に統一されているから、おそらくこの頃、総長から学長へ改められたと思われる。

学長から総長への再改称は、昭和29（1954）年6月8日の評議会決定によるものである。もっとも、これが直ちに実施されたわけではなく、7月6日の評議会で、事務局長より本省との折衝に関する経過報告があったように、東京大学の前例に準ずる扱いを認められるまでにはなお若干の曲折を要している。7月6日以前はすべて学長名であるが、7月20日の評議会を滝川総長名で招集してからは、本省宛書類も学長を1字抹消して総長に書き替えており、この頃ようやく総長名の使用が発効したものと思われる。むろん、法律上はあくまで学長が正しく、この点はその他の国立大学と同じ扱いである。

ところで、総長なる名称が2転3転した理由はいったい何だったのだろうか。総長と学長の2つを経験した鳥養利三郎の回想によれば、学長への一本化は国立大学を旧制7帝大系の総長、その他は学長と差別的に取り扱うことにGHQが難色を示したためであり、本省内にもこれを支持する議論があったらしい。もう1人、学長から総長になった滝川幸辰は、総長と学長は、プレジデントと訳す以外に適当な英語が見当たらず、止むなくGHQの「横やり」に屈したものであり、学校教育法上の規定は「ごまかし」にすぎないというが、2重の職名が大学民主化の重大な障害になると判断されたのは、想像に難く

ない。

評議会議事録を見るかぎり、総長への再改称の積極的理由は大してなく、先例としてあった東大に右へならえする以上を出ないように思われる。単科大学とさして変わらない多くの国立大学と区別する、マンモス大学の長たるにふさわしい職名と言えなくもないが、おそらく本音は、学長への移行が外圧によるもので本学の選択ではなく、これを旧に復したいという辺りにあったと思われる。制度上の形式は学長であるが、実質はすべて総長という複雑な方式はここから始まったものであり、現に昭和40(1965)年3月、大学制度委員会が当時の奥田 東総長へ学長選考基準の改正について答申している。教官人事を含む学内の達示などすべて総長名で行われるが、学外の公の席では一貫して学長として扱われる、たとえば文部省辞令で京都大学学長〇〇〇〇という独特のスタイル、というより極めて分かりにくい使い分けは、今に至るも変わらない。それゆえ、表題に即していえば、学長、総長ともに正しい職名ということになるだろう。

(百年史編集委員会 海原 徹)

訃 報

植竹久雄 名誉教授

本学名誉教授 植竹久雄 先生は、10月22日逝去された。享年78。

先生は、昭和15年北海道帝国大学医学部を卒業、同大学医学部助手、北海道庁立女子医学専門学校教授、札幌医科大学教授を経て、昭和39年京都大学ウイルス研究所教授に就任、血清免疫研究部門を担当された。昭和55年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和40年4月から同55年3月停年退官まで、ウイルス研究所長として、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、昭和55年4月から同62年9月まで富山県衛生研究所長を務められた。

先生は血清免疫学、中でもサルモネラ菌にイブシロンファージが感染し、菌のDNAに組込まれるとサルモネラ菌の表面にあるO抗原に構造変化が起こることを世界に先駆けて発見されるなどの研究成果を残された。その優れた研究業績によってこの分野の発展に多大の貢献をされ、野口英世記念医学賞を受賞された。

また、日本ウイルス学会、日本アレルギー学会、日本感染症学会などにおいて、会長、評議員の要職を歴任された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(ウイルス研究所)

藤本浩之輔 教授

教育学部教授 藤本浩之輔 先生は、10月29日逝去された。享年62。

先生は、昭和31年京都大学教育学部を卒業、引き続き同大学院で学ばれた後、大阪府教育研究所研究員、大阪府科学教育センター主事、大阪市立大学助教授を経て、同55年に本学教育学部助教授に就任、平成元年教授に昇任され、教育人間学を担当された。

先生は「教育人類学」の立場から、子どもの生活と文化に関する実証的研究において優れた研究業績を残された。なかでも子どもたちが創る文化としての遊びに着目した研究は、未開拓の分野を切り開くものであった。主な著作としては、『子どもの遊び空間』『明治の子ども・遊びと暮らし』などがある。

先生は日本子ども社会学会理事、日本教育社会学会評議員などを務められ、学会の発展に貢献された。先生はまた、大阪府社会教育委員、京都府青少年問題協議会委員、大阪市こども文化センター運営委員などを歴任され、昭和56年に大阪府から教育功労者、平成元年には文部大臣より社会教育功労者の表彰を受けられた。さらに、ボランティア活動として「遊びと仕事の村」「親子の自然教室」を主宰されたのも先生の大きな業績である。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(教育学部)

能 楽 鑑 賞 会 の 開 催

平成7年度能楽鑑賞会を下記のとおり開催します。本学学生・教職員の来場を歓迎します。

記

日 時 平成7年12月7日(木) 午後6時30分開演
8時45分終演予定

会 場 京都観世会館
京都市左京区岡崎円勝寺町44 ☎771-6114
(東山仁王門を東へ約300メートル)

演 目 狂言 「寝音曲」 茂山 忠三郎
安東 伸 元 他
能 「遊行柳」 片山 九郎右衛門
中村 彌三郎 他

入場無料

備考：学生証又は職員証等を持参して下さい。定員は550名先着順とします。

(学生部)

日 誌

(1995年10月1日～10月31日)

- | | |
|---|---|
| 10月2日 将来構想検討委員会 | 16日 同和・人権問題委員会 |
| 〳 平成7年度京都大学実務講習会(5日まで) | 〳 京都大学春秋講義 月曜講義(以後の日程は、23日、30日、11月6日、13日) |
| 4日 スウェーデン王国 ルトン大学 Peter Honeth
事務局長他2名来学、関係教官と懇談 | 17日 評議会 |
| 7日 総長、アメリカ芸術科学アカデミー外国人名
誉会員称号授与式出席及び高等教育に関する
調査のためアメリカ合衆国を訪問(13日まで) | 〳 大学院審議会 |
| 〳 農学部・木質科学研究所公開講座「暮らしに
生かす樹と木」(8日まで) | 18日 京都大学春秋講義 水曜講義(以後の日程は、25日、11月1日、8日、15日) |
| 11日 国際交流委員会 | 24日 環境保全委員会 |
| 〳 国際交流会館委員会 | 25日 スイス連邦 科学技術庁 Gerhard M. Schuwey
教育研究局長他2名来学、総長及び関係教官
と懇談 |
| 14日 京都大学市民講座(以後の日程は、21日、28
日) | 27日 保健衛生委員会 |

